展示作品紹介

地球市民交流センターは、「見て、参加して、楽しく、遊び、学び、交流する場」とするため、アート性を持たせた展示作品や環境への理解と交流を深める展示作品を設置しています。

Work 01 / Snowman

Work 02 / Mexican Jungle with Aichi Treasures

Work 03 / Color Globe

Work 04 / Six cercles pour l'ellipse

Work 05 / White Lungs

Work 06 / Worldprocessor

Work 07 / Clover Garden scaled 25 x~

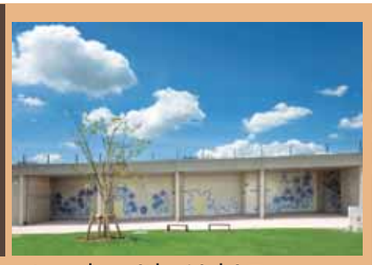
Work 01

Snowman
スノーマン

Inges Idee / インゲス・イデー

インゲス・イデーは、Hans Hemmert（ハンス・ハマート）、Axel Lieber（アクセル・リーバー）、Thomas A Schmidt（トーマス・A・シュミット）、Georg Zey（ゲオルグ・ツァイ）の4人からなるユニットで、1992年よりドイツを拠点に活動しています。ユーモア溢れる作品は、幅広い人々の心に訴えかける魅力があり、ヨーロッパはもちろんのこと、日本を始めシンガポールなどのアジア諸国でも多くのパブリックアートを手掛けています。
本作品のモデルとなるスノーマンは、誰もが知っている雪でできたキャラクターです。時間の経過とともに、溶けて消えてしまうスノーマンは、季節の移り変わりや自然のはかなさを象徴しています。今回の作品では、スノーマンが階下の池に落ちてしまった帽子（鍋）をのぞきこんでいますが、そんなスノーマンもいつしか溶けて水となって池に還っていきます。水の変化をユーモラスに表現している遊び心溢れる作品となっています。 ©Inges Idee / Photo by Kei Okano

Work 02



Mexican Jungle with Aichi Treasures
メキシカンジャングルと愛知の宝

Eduardo Sarabia / エデュアルド・サラビア

エデュアルド・サラビアは、1976年ロサンゼルス生まれのメキシコ人アーティストで、現在もメキシコを拠点として制作活動を行っています。焼き物が有名なグアダラハラで制作活動を行う彼の作品は、カラフルなドローイングやメキシコのタラベラ焼きを使った作品が主となっています。
タラベラ焼きのタイルによって制作された巨大な壁面作品は、愛知県の貴重な焼き物とメキシコの植物を融合させた壁画となっており、それぞれの文化が表現されつつも調和を持って共存する作品は、現代と古代、地域と世界といった価値観の狭間に、神秘的な対話をもたらすことでしょう。数多くの優れた壁画の作家を生み出したメキシコの作家と愛知が生み出す壮大な叙情詩ともいえる壁画となっています。
©Eduardo Sarabia / Photo by Kei Okano

Work 03

Color Globe
カラーグローブ

高橋匡太

高橋匡太は、1970年京都生まれ、京都在住のアーティストで、光や映像を投影する手法を展開して、空間を変容させる大規模なライティング・インスタレーションを多く手掛けています。その活動は世界的に評価されており、多数の賞を受賞しています。
今回の作品は、地球市民交流センターの巨大な球体の体育館を地球と見立てて展開しており、月の満ち欠けのように球体上で変化していく光と色彩は、一日の終わりに静かな時の流れを感じさせます。自然の時の経過を感じさせる光に人々は誘われ、光と自然が融合することができる作品となっています。

©Kyota Takahashi / Photo by Kei Okano

Work 04

Six cercles pour l'ellipse
楕円に沿う六つの円

Felice Varini / フェリチェ・ヴァリーニ

フェリチェ・ヴァリーニは、1952年スイス生まれ、フランス在住のアーティストで、ある地点から見ると建築物の壁に幾何学模様が平面的に見える作品で世界的に有名な作家です。彼の作品は、投光器を使用して壁に図形をプロジェクションして作品を描いていく制作手法を取っており、どんな空間でも広がりを持たせたダイナミックな作品を制作することが可能です。こうした視覚作用に訴えかけるトリッキーな彼の作風は、非常に独特であり、彼ならではの表現スタイルといえます。
「私の制作の場は建築的空間であり、その空間を構成している場所であり、その空間こそが私のペインティング作品にとってオリジナルメディアとなるのです。」と語っている作者にとっては、現場で自身の手によって制作することが重要なテーマとなっています。彼の描く作品と彼の見出した空間が結び付くことで、より創造的に成立するからなのです。 ©Felice Varini / Photo by Kei Okano

Work 05

White Lungs
ホワイト ラング

BRF / ブラフ

ブラフは、アーティストの田中陽明、建築家の関英則、小田木確郎とグラフィックデザイナーの南部隆一の4名で構成されるアートユニットです。彼らは、パブリックスペースにおけるコミュニケーションを情報デザイン・建築・アートの視点から組みかえていくことをテーマにしています。
今回の展示作品「White Lungs」“白い肺”は、この公園を空気の循環を繰り返す一つの身体として見立て、その空気循環の中心にある肺を表しています。白い巨大なバルーンが内蔵された展示空間は、地球市民交流センターで活用している様々な自然エネルギーのデータとリンクさせながら、自然エネルギーの活用によるCO_2削減量を総合的に象徴する肺として表現し、リアルタイムに脈動します。その肺に包まれることによって、自然エネルギーの活用によるCO_2削減について、情報や知識だけでなく空間的に体験学習することができます。また、これら自然エネルギーの紹介パネルも併設し、その機能やリアルタイムで稼働するデータを知ることができます。 ©BRF / Photo by Kei Okano

Work 06

©2009 Elias Hassos

Worldprocessor
ワールドプロセッサー

Ingo GÜNTHER / インゴ ギュンター

インゴ・ギュンターは、1957年ドイツのハノーヴァー近郊に生まれ、現在はNYを拠点に活動しています。フランクフルト大学にて民俗学・文化人類学を、デュッセルドルフ芸術大学にて美術を学びました。
今回展示するのは、1988年より制作されている“Worldprocessor”シリーズから抜粋された作品です。
その時代の問題や文明をリサーチして集められた情報を用いて、光る地球儀上で刻々と変化する世界を表現しています。この作品は、様々な実データに基づいて制作されています。

©Ingo GÜNTHER / Photo by Kei Okano

Work 07

Clover Garden scaled 25 x~
クローバーガーデン ~25倍の世界~

SUEP. / スープ　末光弘和 ＋ 末光陽子

スープは、末光弘和と末光陽子の2人の建築家によって2007年に結成され、東京と福岡を拠点に活動しています。特に自然を生かしたデザインが特徴的で、住宅や店舗の設計デザイン、家具デザインを始め、展覧会に出品するなど実に幅広く活躍しています。
この作品は実際のクローバーを精密にスキャンし、そのまま25倍に拡大しているものです。誰もが一度は自分がこびとになって自然の世界の中に入り込んでみたいという夢を抱いたことを思い出させます。この作品は、こびとになったつもりでクローバーの畑の中で自由に絵を描いたりメッセージを残すことができます。この空間を通して、知らない人々との新たなコミュニケーションを持つことできるインタラクティブな作品となっています。 ©SUEP. / Photo by Kei Okano